

## 『二都物語』の光と闇

- - 主人公の死にある両義性 - -

長谷川 雅世

『二都物語』(*A Tale of Two Cities* 1859)は知名度から言えば、ディケンズの代表作と称することができる。だが、この小説は批評家たちに低く評価され、失敗作と判断されることが多かった。その最大の理由の1つとして、結末でのカートン(Carton)の死が挙げられる。例えば、エドガー・ジョンソン(Edgar Johnson)はカートンの死があまりにもメロドラマ的だと述べ、彼の死の扱い方が小説中で主張されている社会批判や革命の意義を不鮮明にしていると考えている(981-82)。しかし、心理学や構造主義的なアプローチによって再考察されるなかで、この小説への評価は幾分回復したと言える。特に、細部に至るまでの物語の結合性や構成の緊密さは積極的に評価されている。

それでもやはり、カートンの自己犠牲の死は、社会問題に対する説得力を持たない「非現実的な解決策」(Hutter “Nation and Generation” 94)であり、この小説の看過することのできない欠点だと指摘されることが未だに多い。確かに、結末での人類救済者へのカートンの転身は唐突すぎるという感は否めない。しかし、カートンの自己犠牲の死が説得力を持たないと感じられるのは、彼の死が持つ愛による人類の救済という意味がメロドラマ的すぎるためなのだろうか。クリス・ボッシュェ(Chris Bossche)が言うように、結末でのカートンの予言と彼の自己犠牲には「抜き難い曖昧さ」(211)がある。また、彼の自己犠牲が持つ曖昧さは、近年の『二都物語』研究の主題の1つとなっている(Hennelly 217-42)。そして、メロドラマ的であることよりも、この曖昧さこそが、彼の死の説得力を損なわせていると思われる。そこで本論文では、カートンの死を再検討し、彼の死につきまとう曖昧さの正体を明らかにする。そのうえで、ヴィクトリア朝社会を批判しているディケンズの後期小説群のなかで、歴史小説と呼ばれる『二都物語』がどのような意義を持っているのかを考察する。

### 1

『二都物語』の主要な登場人物の多くは、他の登場人物との間に対照関係や分身関係を形成している。このことはカートンの場合にも当てはまる。例えば、レナード・マンハイム(Leonard Manheim)は、容姿は瓜二つだが性格が対極的であるカートンとダーネイ(Darnay)とをハイドとジキルの関係として捉らえている(230-31)。ベス・ハースト(Beth

Herst)は、小説中でジャッカルとライオンに喩えられるカートンとストライバー(Stryver)に对照関係を見いだしている(147)。アルバート・フッタは、「復活(resurrection)」をテーマに持つカートンの対として「死体盗掘人(resurrection man)」であるクランチャー(Cruncher)に注目している(“The Novelist” 17-28)。確かに、ここで挙げられている登場人物たちはカートンと对照関係にある。しかし、結末でのカートンの死を考察する際に注目すべきなのは彼らではない。それはフランス民衆である。

そこで、まず、革命以前から革命時までのフランス民衆について検討する。革命前、権力者たちに搾取されていた農民には、「嫌々ながら育っている(vegetating unwillingly)」(144)様子と、すべてを諦め「枯れて(wither away)」(144)しまおうとする様子を感じられた。パリに住む民衆も「青白い顔(cadaverous faces)」(60)をし、死人のようだった。しかし、小説の中盤から、彼らは内にあった「燻る火」(194)を権力者たちへの憎しみと復讐心で燃え立たせることで、恐ろしい勢いと活発さをもった暴徒へと豹変する。さらに、革命のなかで「人民たちの血」が「長い間無価値でしかなかったが、突然いくらかの価値を持ち始め」(248)、民衆がその命を躊躇せず「犠牲」(244)にしようとしたとも語られる。

では、それと同時期のカートンについてはどうだろうか。カートンは人生を無為に浪費していて、このことが「自分が朽ちて行くことを感じながらも、蝕まれることに諦めながら身を任せていた(sensible of the blight on him, and resigning himself to let it eat him away)」(122)と、フランス民衆の場合と同様に植物の比喩で描かれている。さらに、カートンが自分自身を、「幼くして死んだのも同然」(180)の「灰の塊」(181)と呼ぶように、彼は生きることに目的も喜びも持たない死人同然だった。しかし、ルーシー(Lucie)への愛情が「灰の塊でしかない(彼に)火を点した」(181)。さらに、革命のなかで自らの命が彼女の夫を救えると知ったとき、彼はその命に価値を見だし、そして迷うことなくそれを捧げた。

ここまで見てきたように、生に無気力で無為に命をつないでいた「酒の澱」(194)に喩えられるフランス民衆と、「灰の塊」でしかないカートンとは、それぞれ憎悪と愛情で命に火を点された。そして両者の点火された命は、革命中に無価値なものから価値あるものへと変化する。さらに、最終的に両者はその命を躊躇することなく捧げる。このように民衆とカートンの自己犠牲までの歩みは共通している。しかし、両者が迎える結末は両極端なものである。

フランス民衆の1人であるマダム・ドファルジュ(Madame Defarge)は、ハリー・ストーン(Harry Stone)が言うように、暴徒と化す民衆全体を体現している(175)。その彼女が

迎えた死は、彼女が望むところであった市街戦での勇敢な死などではなかった。それは、ミス・プロス(Miss Pross)との私闘中に銃が暴発して「ピカッと光りバンと鳴った(a flash and a crash)」(397)瞬間に起こった、呆気ない惨めなものだった。一方、ギロチンが「ガシャン!(Crash!)」と鳴って「あらゆるものがぱっと消え去る(all flashes away)」(403)と描写されるカートンの死は、彼が望んだ通りのもので、「崇高な」(403)ものだった。両者の死は“flash”と“crash”という同じ言葉を使って表現されてはいるが、ディケンズ自身の言葉を借りれば、マダム・ドファルジュの死は「つまらない死」であるのに対し、カートンの死は「荘厳さ」を湛えている(*Letters* 260)。類似した過程を経てきた民衆とカートンだったが、最終的な結果、つまり両者の死は対照的なものだった。これは両者の間にある唯一の大きな違い、すなわち、前者を自己犠牲へと駆り立てた憎しみと後者を自己犠牲へ向わせた愛情に対する、ディケンズの思いの表れだと考えられる。両者の死を対照的に描くことで、ディケンズは憎しみや復讐心を批判し、それと同時に他者を慈しみ愛する心を称揚しているのだ。ミス・プロスとマダム・ドファルジュの私闘の場面で述べていた「愛情はいつも憎悪よりもはるかに力強い」(397)という主張を、ここでも繰り返しているのである。

さらに、フランス民衆とカートンの死の対照性は、カニバリズムとクリスチャニティに対するディケンズの主張だとも解せる。というのも、憎しみに突き動かされた民衆の残忍さは、カニバリズム的なものとして描かれているからだ。例えば、民衆の1人ジャック3号(Jacques Three)は「美食家」(388)と呼ばれ、「人命に餓え、食人鬼のような面持ち」(345)だと描写される。また、ダーネイの死刑判決を待ちわびるマダム・ドファルジュは、「宴をしている」(348)と描写され、「宣教師」(215)と呼ばれる彼女は「聖女ギヨティン」(402)の化身としても描かれている。

一方、カートンには「キリスト的殉教者」(Dunn 230)のイメージがある。「我は復活であり命である、と主は言われた。我を信じる者は死んでも生きる。生きて我を信じる者は死することはない」(John 11.25-6)という聖句が、小説の後半でカートンの脳裏に何度も去来する。そして、カートンの自己犠牲がダーネイに再び生きる機会を与えることが明らかになるにつれて、「我を信じるものは死んでも生きる」の「我」、つまりキリストとカートンとが重なり始める。そのうえ、結末では、彼の死後に圧制者たちが「罪をあがない」(404)その後人々が繁栄することが予言される。この語りも、人々のために犠牲になったキリストのイメージをカートンに与えている。このように、マダム・ドファルジュとカートンはそれぞれ、残忍で非人間的なカニバリズムとクリスチャニティの基盤となっている利他主義を体現している。だとすれば、彼らの死の対照性を通してディケンズは、前

者を否定すると同時に後者を讃え、「ギロチンが十字架を凌駕する」(302)ことはないと言張していると言える。

2

フランス民衆の場合と対照的に、カートンの死は他者を愛し慈しむ心とキリスト教的利他主義を体現している。しかし、彼の自己犠牲は、フランス民衆の場合と同様の憎しみから生じたものとして理解できる側面をも持つ。

ロンドンでダーネイの裁判があった日、カートンは彼と別れたあと鏡の前で、「おまえはあいつが憎いんだ」(116)と叫ぶ。このときカートンは「憎い(hate)」という激しい言葉を使っているが、これはほとんど面識のないダーネイに向けられたものではない。この直前にカートンは鏡に向かって、「あいつが墮落する前のおまえを、墮落しなければなっていたかもしれないおまえを思わすのか」(116)、と独白している。容姿は瓜二つなのに全く異なった人生を歩んでいるダーネイの姿が、無為で自墮落な生活を送ってきたことをカートンに後悔させている。過去を悔やみ、現在の自分を嫌悪する気持ちが、彼に「憎い」と言わせたのだ。彼の憎しみは、墮落した現在の自分自身、換言すれば、今の自分を作り上げている自分自身の過去に向けられている。

過去に対する憎しみはフランス民衆にも見いだせる。マダム・ドファルジュは執拗にダーネイの命を奪おうとするが、それは彼の父親と叔父が彼女の家族を苦しめ死に追いやったからだ。このことは小説中で、「彼女はダーネイではなく彼の父親たちを見ていた」(391)と語られる。マダム・ドファルジュはダーネイという現在ではなく、彼の先祖という過去を憎み復讐しようとしている。そして彼女は憎い過去への復讐として、ダーニーの家系を「絶滅」(369)させようとする。彼女は先祖からの血筋という繋がりを断裂させること、すなわち、過去からの時間の流れを断ち切ることで復讐を果たそうとしている。過去を断ち切りたいという願望は、民衆の場合にはもっと明らかである。民衆は、忌まわしい過去である旧体制とその権力者たちをフランスの地から消滅させようとする。それに加えて、彼らは新体制下で、無から新たな時間の流れを創り出そうとする。それゆえ、民衆にとって新体制下における時の流れは、旧体制から受け継いだものではなく、新たな「民衆による時間の流れ」(301)であり、それはまさに、「人類の再生」(302)や「新たな時代」(301)の始まりだった。

憎むべき過去に対する復讐のなかで、民衆は過去を消して過去を持たない新たな時間の流れを創り出すために、自己の命を捧げようとした。そして、過去に対して憎しみを抱く

カートンもまた、同じ行動を取る。ルーシーに愛を告白する場面で、カートンは「あなたが愛する命」(183)のためにならいつでも命を「捧げる」(183)と言う。そして実際に、ダーネイの死刑が確定したとき、カートンはルーシーに「あなたが愛する命」(366)と囁き、自らの命を捧げる決意をする。これだけを見れば、カートンはダーネイを救うために命を捧げたように思われる。しかしルーシーへの告白の場面で、彼は「幸福な父親の顔と瓜二つの小さな顔」があなたを仰ぎ見るとき、「あなたの愛する命を守るため」に命を投げ出す男がいたことを思い出して下さいとも言っていた(183)。ここでの「あなたが愛する命」とは、ダーネイに生き写しの子ども、すなわち、カートンともそっくりな子どもである。だとすれば、カートンは単なる他人への愛だけでなく、自分と瓜二つの子どものため、ひいては、自分への愛のために命を捧げようとしたと言える。彼のルーシーへの愛情が「エゴイズムの延長」(Lane 77)だとまでは言わないが、彼の自己犠牲は自己への愛によるものでもあった。

カートンの自己犠牲にこのような意図があったことは、結末で語られる彼が見たであろう未来の光景からも分かる。そこでは、カートンと名づけられた子どもが立派に成長し、カートンが「人生に印した汚点」を「消し去って」くれるのが彼には見える(404)、と語られる。さらに、カートンはその子どもに、「汚点」であった自分の過去を払拭し、「かつては自分のものだった人生の道」(404)を歩むことを期待する。自分の名を負う子どもを通して、彼はかつて瓜二つのダーネイが示した「墮落しなければなっていたら自分」(116)になろうとしている。カートンは、分身のような子どものために命を犠牲にすることで、憎むべき過去を消し去り、汚点である過去を持たない新たな人生を始めようとしている。だとすれば、カートンの自己犠牲は、民衆の場合と同様に、過去の抹殺と過去を持たない新たな時の流れを創造する試みだと理解できる。ただし、それはジョン・グロス(John Gross)が言うような、生きることが無意味だった人間にとっての取るに足らない行為としての自殺(191-92)ではない。彼の自己犠牲の死は、民衆の憎い過去への「自殺的復讐」(344)と同種のもの、ある種の復讐行為という側面も持っている。

### 3

この小説の冒頭でディケンズは、フランス革命前夜の時代を「あまりにも現代と似ていた」(35)と語っている。ディケンズはその時代を小説当時と結びつけ、これから語られる物語が当時のイギリス社会と関連していることを示唆している。だとすれば、1850年代末のイギリス社会を背景にして捉え直したとき、これまで考察してきた主人公の死にはどの

ような意味を読み取ることができるのだろうか。

1851年の第一回万国博覧会以降の大好景気のなかで、イギリスでは、その恩恵に与った者はどんどん豊かになった。その一方で、そうでない労働者たちはますます貧困に苦しみ、そのうえ、繁栄による工業化のもとで新たな都市型の下層民が増加していった。『二都物語』は、裕福な国民と貧しい国民、すなわち「2つの国民」の間にあった溝がますます深まっていたところに連載されていた。小説当時のイギリスは、小説の冒頭で描かれているフランス革命前夜と同様に、「最良の時代」と同時に「最悪の時代」であり、「光の季節」と同時に「闇の季節」であった(35)。ならば、この小説の貧困に喘ぐフランス民衆の姿は、小説当時のイギリスの下層階級を讀者に連想させたはずである。実際に、『リトル・ドリット』(*Little Dorrit* 1855-57)で描かれている煌びやかなコヴェント・ガーデンのアーチの下で残飯を漁り、身を寄せ合っている「老若のネズミたち」(141)と呼ばれる下層民は、豪華な仮装舞踏会が行われているところに「暗い穴で身を寄せ合いながら眠るネズミたち」(143)であるフランス民衆に似ている。また、汚い建物が密集し、「ごみの山」と「汚染された毒気」が充満しているサン・タントワン(Saint Antoine)の様子(66-67)は、『荒涼館』(*Bleak House* 1852-53)のトム・オール・アローンズ(Tom-all-Alone's)を思い起こさせる。それと同時に、革命前のフランスの圧制者たちの姿は、小説当時のイギリスの為政者たちと結びつけられる。確かに、イギリスの為政者たちは、『二都物語』のフランス貴族のような直接的かつ暴力的な搾取者ではなかった。だが、ディケンズの後期の諸小説で語られているように、彼らは怠慢に陥り、下層民たちの窮状に対して具体的かつ有効な手段を講じてはいなかった。例えば、このことは『リトル・ドリット』では、仕事がしたくても仕事ができなく貧窮している人々の声は、迂遠省(the Circumlocution Office)という「あの輝かしいお役所の耳には全く届かない」(120)と語られている。イギリスの支配者たちは、怠慢や無視というかたちで貧民たちを苦しめる圧制者であった。だとすれば、フランス民衆による圧制者たちへの暴力的反逆には、イギリスの貧民による支配者階級への反乱が重ね合わされていて、それは下層階級の人々による暴力的逆襲についてのディケンズの警告だと理解できる。

このような小説の結末で、ディケンズはカートンの死を通して、他者を愛する心とキリスト教的利他主義を称揚していた。そのうえ、他者への愛ゆえの彼の自己犠牲の後に、圧制者たちは徐々に滅び、そのあと「美しい都市と輝く人々」(465)が現れるとも語っている。ここでディケンズは、他者を慈しみ思いやる心によって、社会が改善されると訴えていると考えられる。さらに、カートンの愛によって暴力の連鎖に終止符が打たれることを考えれば、ディケンズは愛情や慈愛によってイギリスでの破壊的革命は防ぐことができると主

張しているとも言える。

しかし、すでに述べたように、結末でのカートンの死には、過去に対する復讐という側面もあった。それではこのことと小説当時のイギリス社会との間には、どのような関係があるのだろうか。

この小説ではカートンの過去や、彼がなぜ無気力になり墮落したのかが詳細に語られることはない。しかし、私たちは彼と同僚のストライパーとの関係から、そのことを読み取ることができる。

カートンは「優れた才能と立派な心を持った男」(122)である。一方のストライパーは「口が達者で、無節操で、世慣れしたずうずうしい男」で、弁護士としての能力をも欠いていた(117)。しかし、弁護士として成功を収めていたのは、ストライパーだった。世俗的な能力と「人を押しのけながら人生で申し上がる」(110)ことには長けていたストライパーは、カートンという有能な黒子を得ることで出世した。だからと言って、彼がカートンに、そのような役回りを強要していたわけではない。「実際のジャッカルがライオンの地位にまで上ろうなどと考えないとされているように、カートンは(ストライパーという)ライオンに仕えるジャッカルの境遇から抜け出そうなどと思っていなかった」(241)と語られるように、カートンには自分のために邁進して社会的成功を勝ち得ようという意欲はなく、ライオンのために餌を漁ると信じられていた「ジャッカル」の地位に自ら甘んじていたのだ。さらに、このような状態になったことについて、カートンはストライパーとの会話のなかで、「君はいつも突っ込んで分け入って押しのけてぐいぐい進んでいた。休むことなくね。だから僕は錆びつき休むしかなかったんだろ。」(120-21)と述べている。カートンは、同僚のように己の利益のために他人を蹴落として生きることができなかったのだ。小説中に、ストライパーがカートンを「無粋な奴」と呼び、カートンがストライパーを「繊細で詩的な精神の持ち主」と呼ぶ場面がある(168)。しかし、事実は明らかにこれとは逆である。「立派な心」と「繊細で詩的な精神」を持つ彼は、自分の利益のために無慈悲かつ無節操になる生き方に順応できなかった。

ヴィクトリア朝では、公的な場は男性の領域だとされていた。この考えを支えていたのは、公的な場、とりわけ経済活動の場は競争の場であり、その場所には本来「競争向きで攻撃的で所有欲のある」(Poovey 77)男性こそが相応しいという概念だった。さらに、この小説の同年に出版された『自助論』(*Self-Help* 1859)が典型的に示しているように、当時の社会ではその公的な場で独立独行によって成功を収めた男性が英雄視され、男性はそれを見習うようにと鼓舞されていた。当時のこのような風潮のなかで、カートンはストライバ

ー(Stryver)のように「張り合っ(strive)」生存競争を勝ち抜く意思はなく、社会の落伍者となった。『自助論』のなかで自助を果たす男性に必要なものとして繰り返される「高潔な野心、克己、そして忍耐力(honorable ambition, self-denial, and perseverance)」<sup>1</sup>がカートンには「幻想」だった(121)と、この小説では語られている。そのことは、彼が小説当時の社会で理想とされていた男性の人生を歩めなかった男であることを暗示している。そして、生存競争を戦うことのできないカートンが選んだ道は、人生を「投げ捨て」(182)、自分を「抑圧して歪め」(182)、徹底的に落伍者になることだった。彼は男性の理想像という当時のイデオロギーに抑圧され、押し潰された男だと言える。

自ら進んで自堕落な生活を送る一方で、カートンはそのような自分を嫌悪し、今とは全く違う自分になりたいという気持ちも持っていた。特に、ルーシーを愛し、自分と容姿はそっくりなのに立派に人生を生きているダーネイに彼女の愛情が向けられていることを知ってから、彼の自己嫌悪と悔恨の念はさらに強まっていった。そして、カートンは「もう一度努力し、新規まき直しをし、怠惰と肉欲を払い除け、諦めた戦いを戦って見ようかという漠然とした思い」(181)を抱く。しかし、彼自身が言うように、それは単なる「夢」(181)に過ぎなかった。彼は堕落することに甘んじると同時に、そのような自分に対する嫌悪と悔恨を抱え続けなければならなかった。しかし、彼にその感情を解放し爆発させる機会が訪れた。それがフランス革命である。

この小説で描かれているフランス革命は、民衆の長年抑圧されていた憎しみや復讐心が、破壊的な力として一気に解き放たれた結果である。そして、カートンの鬱積した感情も、フランス民衆の場合と同じ形で解放される性質のものだった。小説の前半に、カートンがダーネイをまじまじと見つめ、その直後に壁にグラスを投げつけて粉々にする場面がある(114)。このときのカートンは、ダーネイを目の前にして抑えられなくなった自己嫌悪の念をグラスにぶつけたのだ。粉々に壊されたグラスは、彼の抑圧されていた感情が表に出たとき、それが破壊的な性質を持つことを象徴的に示している。そして、革命の熱狂のなかで、彼はこれまで押さえつけてきた感情を爆発させ、それを自らを破壊することに向けた。フランスの民衆は、圧制者たちを殺し、旧体制を崩壊させるという暴力として積年の怒りを解放した。それに対して、ヴィクトリア朝社会のイデオロギーに抑圧され、「ブルジョア階級のエトス」の「犠牲者」(Rignall 583)であるカートンは、己の命を自ら望んで断ち切るという破壊的で暴力的な行為のなかで自らの怒りと憎しみを解放した。

カートンの自己犠牲の死は、彼を抑圧していたヴィクトリア朝社会への復讐としてはっきりと描かれたり、その社会の秩序や体制を崩壊させるものだと明言されているわけでは

ない。しかし、民衆の破壊行為とあまりにも多くの類似性を持っているために、彼の破壊行為には、彼を抑圧していた社会を崩壊させる力を感じてしまう。また、この小説全体を通してディケンズは、抑圧や暴力は新たな抑圧や暴力を生み、それらは必ず報いを受けると主張している。例えば、革命の必然性について、「フランスの何百万という惨めな市民、繁栄していたはずの資源が悪用されて誤用されていた」のを見ていれば、革命は「避けられなかった」(267)ことは明らかだったと述べている。それゆえ読者は、ヴィクトリア朝の社会に抑圧され、押し潰された末のカートンの自己犠牲という破壊行為にも、彼を抑圧していた社会への応報という意味合いを読み取ってしまうのである。

『二都物語』の結末での主人公の死は、他者を愛する心とキリスト教的利他主義とを表現していると同時に、憎しみから生まれた復讐行為でもあった。さらに彼の死は、ヴィクトリア朝社会の改善への訴えとその希望を示すと同時に、ヴィクトリア朝社会に抑圧されていた人々が暴力的な報復を行う可能性を内包していた。このようにカートンの自己犠牲の死には、相反する意味が併存している。このことがジュリエット・ジョン(Juliet John)のような批評家に、彼を純粋な「英雄」や「キリストのような人物」とみなすことを疑問視させている(197)原因である。言い換えれば、このことが彼の死が持つ「抜き難い曖昧さ」の原因なのである。

確かに、暴徒と化したフランス民衆への態度が示すように、ディケンズは、暴力的な破壊行為による既存社会の崩壊や急激な社会変革を望んではいなかった。このことは、結末での予言における、新・旧圧制者たちが「徐々に」罪をあがない、「だんだんと消えていき」、そのあとに「美しい都市と輝く人々」(404)が現れるという言葉使いからも分かる。その一方で、カートンとフランス民衆との間にある類似性に気づいたとき、彼らを対照関係と同時に類似関係に置いたディケンズのヴィクトリア朝社会に対する否定的な感情、例えば、己の物質的利益のために無慈悲かつ無節操になることをよしとするような道徳的に墮落した社会に対するディケンズの怒りや急進的な思いにも気づかざるを得ない。ディケンズの心の奥底には、腐敗したヴィクトリア朝社会を改善するには、それを一端破壊してしまい、その「深淵(abys)」（404）から新たに社会を構築するしかないのかという思いがあったのだ。ディケンズ自身、カートンの死にこのような自らの危険な感情が表れていることに気づいていたようである。だから彼はそれを覆い隠すために、主人公の死が他者への愛と他者の幸せのための自己犠牲ゆえであることを誇張した。そしてこのことが、主人公の死を

メロドラマ的すぎるや非現実的だと感じさせる結果に繋がったと考えられる。

後期小説でディケンズは、小説の中心を個人的な悪漢から社会悪や社会問題を描くことへと移した。さらに、しばしば指摘されるように、それらを描き出していくなかで、ディケンズはイギリス社会に対する明るい展望を明確に抱けなくなっていき、初期の楽観主義を失う一方で失望や悲観の影を濃くしていった。後期小説の中期に位置する『二都物語』の結末には、そのようなディケンズのヴィクトリア朝社会に対する明るい希望と怒り交じりの暗い感情とが同居している。「光の季節」と同時に「闇の季節」だったという冒頭で始まるこの歴史小説は、「光の季節」と同時に「闇の季節」であったヴィクトリア朝社会を描いている。そして、その結末での主人公の死は「光」と「闇」を同時に抱え、さらに、作者の心の「光」と「闇」とを集約しているのである。

#### 註

<sup>1</sup> 『自助論』では、野心については、例えば、もし労働者が「高い野心」と「豊かな精神」を持っていれば、彼は人生において、己のみならず他者をも向上させることができると言われる(259)。克己については、「未来の利益のために現在の充足を犠牲にする」という「克己」は最も学ぶべき美德であると述べられている(247)。忍耐力に関しては、「忍耐力こそが成功の最大の要因だ」(16)という言葉が紹介されている。

#### 引用文献

- Bossche, Chris R. Vanden. "Prophetic Closure and Disclosing Narrative: *The French Revolution and A Tale of Two Cities*." *Dickens Studies Annual* 12 (1983): 209-21.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Graham Storey, The Pilgrim Edition. Vol. 9. Oxford: Clarendon Press, 1997.
- . *Little Dorrit*. Ed. Harvey Peter Sucksmith, Oxford World's Classics. Oxford & New York: Oxford UP, 1999.
- . *A Tale of Two Cities*. Ed. George Woodcock, Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin Books, 1985.
- Dunn, Richard J. "Far, Far Better Things: Dickens' Later Endings." *Dickens Studies Annual* 7 (1978): 221-36.
- Gross, John. "A Tale of Two Cities." *Dickens and the Twentieth Century*. Ed. John Gross & Gabriel Pearson. London: Routledge & Kegan Paul, 1962. 187-97.

- Hennelly, Mark M. "‘Like or No Like’: Figuring the Scapegoat in *A Tale of Two Cities*." *Dickens Studies Annual* 30 (2001): 217-42.
- Herst, Beth. F. *The Dickens Hero: Selfhood and Alienation in the Dickens World*. New York: St. Martin's Press, 1990.
- Hutter, Albert D. "Nation and Generation in *A Tale of Two Cities*." *Critical Essays on Charles Dickens's A Tale of Two Cities*. Ed. Michael Cotsell. 1978. New York: G. K. Hall, 1998. 89-110.
- . "The Novelist as Resurrectionist: Dickens and the Dilemma of Death." *Dickens Studies Annual* 12 (1983): 1-39.
- John, Juliet. *Dickens's Villains: Melodrama, Character, Popular Culture*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. 2 vols. New York: Simon & Schuster, 1952.
- Lane, Christopher. *Hatred & Civility: The Antisocial Life in Victorian England*. New York: Columbia UP, 2004.
- Manheim, Leonard. "A Tale of Two Characters: A Study in Multiple Projection." *Dickens Studies Annual* 1 (1970): 225-37.
- Poovey, Mary. *Uneven Development: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England*. Chicago: Chicago UP, 1988.
- Rignall J. M. "Dickens and the Catastrophic Continuum of History in *A Tale of Two Cities*." *ELH* 51 (1984): 575-87.
- Smiles, Samuel. *Self-Help*. London: John Murray, 1921.
- Stone, Harry. *The Night Side of Dickens: Cannibalism, Passion, Necessity*. Columbus, Ohio: Ohio State UP, 1994.

『中部英文学』26号(日本英文学会中部支部, 2007年3月) pp. 15-28.